西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.74　2011年10月号

先月はドラッカーのマネジメントという本から、組織の成長に関する話を書きました。組織は大きくなること自体に価値はなく、よい企業になることを目標にすべきだという話です。これに関連して、以前、ある経営者からこんなことを言われたことがあります。

「会社を大きくしよう、いい会社にしよう、と昼も夜もなく働き、休日も休まずがんばってきたけれど、あるとき、こうしてがんばっていることは、ひょっとしたら経営者のエゴじゃないのか、と疑問を持つようになってしまった。従業員は誰一人、会社が成長することなど望んでいなくて、自分の生活が成り立ちさえすればいいのに、経営者の身勝手な思いでがんばることを強要しているのではないだろうか。」

会社を成長させようという思いは確かに経営者のエゴから始まるのかもしれません。会社を成長させることが経営者の見栄であったり、自分の収入を増やすためだけであればそれはまさしくエゴで、それに付き合わされる従業員は不幸です。でも、会社が成長することによって、そこに勤めること自体を誇りに思えるようになったり、給料が少しでもよくなることによって、ひょっとしたら従業員も以前に比べてより幸せを感じられるようになるかもしれません。もしそうなら、これも経営者のエゴと言えるのでしょうか。あるいは、成長を望まない会社しかいない業界で適正な競争が働かず、不十分なサービスしか受けられなかったお客様が、成長を望む会社によって良いサービスを受けられるようになるとすればどうでしょう。

幸せは人それぞれですし、「大きな会社」と「いい会社」は必ずしも同じではありません。そして、いい会社に勤めることや給料を多くすることが従業員の幸せ、と決め付けるのはそれこそエゴかもしれません。でも、少なくとも、経営者個人の満足を追求するエゴと同列とは思えませんし、一生懸命働かないと生きていけなくなるのが自然の摂理だとすれば、組織の全員が一生懸命に働くと、結果的に成長せずにはいられないような気がします。

先月も書きましたが、ドラッカーは、組織や会社は人を幸せにするための道具と考えていたようです。経営者1人を幸せにするための道具ではありません。何のために会社を成長させるのか、という質問への答えを持つことが、エゴかそうじゃないかの分かれ目になりそうです。